

最近遺品整理の予約をしたという事前相談が非常に増えてきました。

しかし、その人の死を待つような仕事をしているというイメージが嫌だったので、予約は今でも受け付けていません。

でも、すごく電話が多くなってきたので、「何で僕のところにかけてくるんだらう」と思っ、数年ほど前から無料相談という形でお話を聞きに行くことになりました。

従業員には一切行かずに、電車賃も相談費用も一切受け取らないという条件で、自分の都合のいい日にしか行かないと決めて、今まで7、8年ぐらゐの間に、全国1500人ぐらゐの方に会いに行き、いろんなお話を聞かせてもらいました。

事前相談される方々をタイプ別に見ていくと、3分の1の方は、「全く身内がいないので他人に迷惑を

かけたたくない。だから、事前に相談に乗ってもらいたい」という人たちです。

次に多いのが、今は一人住まいで、子どもはいるけど遠方に住んでいるので、あまり子どもに迷惑や負担をかけたくない、できることはできるだけ自分でやりたいという人で、3分の1ぐらゐいます。

残りの3分の1ぐらゐは、子どもも近くにいるし、近所に親戚もいるけど、「奴らには絶対にやつてもらいたくない」という人です。「できたら、死んだことも黙っておいて欲しい」という人も非常に多いです。これには驚きました。

実際にそれは可能と言えは可能です。ちゃんとした遺言を書いて、弁護士に依頼すれば、親族に黙って火葬から埋葬まで全部できます。

法律的には全然問題ないんですが、そういうちよつと胸が痛むような依頼を希望する人たちが、今、非常に増えていますね。

更にびっくりしたのは、「できれば早く死にたいの。吉田君、どうしたらうまく死ぬるかしら？」と相談されることが多いことです。

「すごく幸せで、申し訳ないくらい良い時代を生かしてもらったと思っている。不満は全くないのだけれどできれば早く死にたいの」と言われるのです。

あるとき訪問した、すごく元気な73歳のおばちゃんがありました。六つも七つも習い事をしていて、体もまだピンピンです。いつも、「私はすごくハッピーよ。楽しい、楽しい」と言っています。

それで、「○○さん、こんなに元気なら100歳くらいまで大丈夫です」と言ったら、「無理、無理」と言うんです。「何で無理なの？」と聞いたら、「だって、お金が足りないもん」と言っています。

「いやあ、○○さんだったら年金

もあるし、何とかありますよー」と言ったら、「国が借金しているのに、買い物すらも自分で行けないような状態で、無理やり長く、人の借金で生きてくはないわ。今あるお金を使い切るにはまだあと10年ぐらゐある。これを使い切ったら、私は死ぬつもりよ」と言われるのです。

一方で、自分がどういう目的を持って毎日を送っているのか、毎日何をしようと思っているのかということすら、意識できずに漠然としている人たちも非常に多いです。

そういう人たちに何かしらのきっかけを与えて、自立度をちよつとも高める取り組みを少しでもやっていけたら、社会はもつともつとよくなっていくんじゃないかと思っています。

(宮崎県が主催した「孤立死防止セミナー」より)

キーパーズ有限公司 代表取締役

吉田 太一

Yoshida Taichi

遺品整理、事前相談者の3タイプ

- ① 身内がいらない
- ② 子どもに迷惑を掛けたくない
- ③ 家族にやつてもらいたくない

遺品が教えてくれたこと

